



かたいしゅういち

形井秀一

KATAI Shuichi

筑波技術大学保健科学部



## 中医基本用語辞典

東洋学術出版社

Dictionary of Chinese medicine:  
Basic terms

監修：高金亮  
主編：劉桂平・孟静岩  
翻訳：中医基本用語辞典翻訳委員会  
本体価格：8,000円 ISBN49249548888

1949年の毛沢東宣言を踏まえ、「中医学」は古典をベースとして再構築されていった。日本の訳語で言えば、その時代の中国医学は「中国漢方」であり、「中医学」になりきれてなかったのが実情ではなかったか。当時、日本で中医学の翻訳出版を行っていたのは、燎原書店や三景書店、中国漢方などであった。中国漢方の『中国漢方医学概論』（1965年初版・南京中医学院編）などは、当時としては、かなりまとまった東洋医学の刊行物として、東洋医学を学習しようとする者には役に立ったが、現代「中医学」のような複雑な理論構成はまだ見られない。確かに、現代西洋科学や西洋医学の基礎を学んだ人間が伝統の東洋医学を再構築し直そうとした努力が形になった部分に見えるが、それは1950年以前の東洋医学の基礎の上に生み出されたものであり、その後育ってくる第2世代が伝統東洋医学を深化させて生み出すことになる将来の「中医学」の初期的な形と言わざるを得ない。

1970年代以降、中医学は世界に広がった。1972年には日中国交回復が実現し、中国から「中国漢方」が直接日本へ入ってくることになった。当時は、中国が針麻酔で資本主義社会へ打って出ようとしていた時期であり、テレビや8ミリビデオで針麻酔の様子を知ることができ

た。東洋医学のグローバル化が1990年代や2000年代になって急に起こってきたように日本からは感じるかも知れないが、実は、中国にとっては、中医学のグローバル化は1970年代から始まっているのであり、1990年代以降2000年代はむしろ日韓など他の国を巻き込んだグローバル化総仕上げの時期であると言えるのではないか。

現在の中医学に、病名や証名は、1,700あると言われる。韓国や日本では数百から500に満たないと見なされるのに、である。中医学は、現代の日本や韓国の東洋医学体系のみでなく、1970年代以前の中国の東洋医学体系をも凌駕する概念として体系化されていると言えよう。この複雑さは、中医学の知識のあるなしや臨床経験の有無の範疇で語れない体系へと中医学が変貌してしまったことを意味するように私には思える。

さて、中医学の変化そのものをここでは論じないが、本書の序文で述べられているように、中医学を学ぶには、多くの基本的な用語を「正確に理解すること」が「鍵」であることは言うまでもない。現在中国で発刊されている中医学辞典の中で最大のものは『中医大辞典』（人民衛生出版社）であるが、これが初版36,300語（1995年）、第2版38,500語（2005年）であるの